卑肉と棒

さとひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卑肉と棒

【Nコード】

N6201Y

【作者名】

さとひろ

【あらすじ】

超肥満のひろ子と容姿に恵まれているがすべてにおいてやる気のない祐一の二人は交際8年。

来年夏に30歳になる祐一は同じ夏に33歳になるひろ子に「来年夏までに痩せたら結婚、痩せなかったら別離」と宣言する。期限まであと7ヶ月。

ひろ子のダイエットの行方と祐一への思いは？

体重102キロ

ひろ子は一日、鬱屈していた。なんのことはない、昨夜読み終えた小説のラストがあまりに救いがなくて読後感が悪かったのだ。ひろ子はその小説を一晩で読み終えた。ひろ子が何かのにめりこみ、いつまでもその世界に浸っているのは珍しいことではない。7巻続いた魔法使いの少年たちの物語は徹夜して泣きながら読んだし、オペラを題材にしたミュージカル映画は映画館に10回も通った。それは本や映画に限ったことではなくて、俳優やらアイドルやらにはまって彼がどんな端役の出演作でもすべてを見た、なんてこともよくある。

でもたいてい、すぐに醒める。

先日もある個性俳優にはまって彼女は芸暦の長い彼の作品を手当たり次第に見た。レンタルショップやインターネットでDVDを借りて画面の中の彼を見続けた。寝ても醒めてもその人のことを考え、興味のない友人に彼の魅力を熱弁し、顔も知らない彼の妻に嫉妬した。しかし、あと映画1本で完全制覇というところで急に見るのをやめた。

飽きたのだ。

熱しやすく、醒めやすい。それが自分だと彼女自身知っている。そんなひろ子は8年間、変わらずにはまり続けている人物がいる。

それは須藤祐一、ひろ子の恋人である。

ひろ子にとって祐一は初めての男だ。祐一以外の男とはデートすらしたことがない。祐一と8年間付き合っている理由の一端もそこにあるといえる。祐一ともし別れたら、ほかの人と付き合う自信がない。それでどんな仕打ちをされても彼を切り捨てられないのだ。

ひろ子は大きな体を丸めて棚を覗き込む。黒いファーつきショートブーツの片足がない。床に座りこんで棚板の奥まで見ると2足のショートブーツと探していた片足が乱れて重なりあっている。綺麗に並び直したため息をついた。

通常3日に一度の休みが今回のシフトでは4日連続出勤になっていた。ひろ子の体型で立ち仕事を続けるのはなかなかしんどい。4日目になると重い体重を支える両足が悲鳴をあげている。

ひろ子は超がつくほどの肥満体型なのだ。身長162センチに対して体重は100キロを超えている。ダイエット、ダイエットと常に言っているくせにこの衣料品量販店で働いて3年になるがその間、一度も100キロをきっていない。ボーナス前の面接で店長に直接「痩せたほうが君のため」と言われたときも笑ってごまかした。

床の冷たさが火照った足に気持ちがいい。

ひろ子の担当する靴やバックなどの服飾雑貨はたいてい棚に並べて陳列されているが下段の商品の整理など標準程度の人たちがしゃがんで行う作業がひろ子にはできない。一応しゃがむことはできるが長続きせず、すぐに足がぶるぶると震える。そうなると直接、御影石の床に正座をして作業を行うことになる。はじめは「床に直接座るなんて汚いよ」と笑っていた同僚もひろ子の体型への理解を深めたからか単に見慣れたせい最近ではひろ子が床に座り込んでいても何も言わない。

ずっとこのまま座っていたいと思いつつ、立ち上がった。

7万5千円

携帯電話の目覚まし機能を停止して、祐一は布団から顔をだした。就寝時には7時に起床するつもりだったのだがスヌーズし続けた結果、すでに7時半になっていた。瞬きを2、3度してみる。目ヤニで瞼が動かさじぶらい。コマ送りのようなゆっくりとした動作で布団から起き上がった。

洗面所の鏡には実際の29歳より何歳か老けた印象の自分の姿が映っている。この老けた印象は手櫛ではまったく言うことを聞かない剛毛の中に白髪が目立ってきたせいかもしれない。男は外見に価値があるのではないと言うなら聞こえがいいが、抜いたり染めたりするのは面倒だし、父親の頭髪から推測するに、脱毛したり染髪などしたらたちまちに薄毛になりそうなので、とくに手を施してはいないだけだ。

ひろ子は会う度に染髪を勧めるし、一度などは眠っていて目を覚ましたら、まさにハサミを手に狙いを定めているひろ子と目が合ったこともある。

ひろ子はそもそも自分をブランドのように扱っている。付き合い始める前からひろ子は自分を「かっこいい、かっこいい」と誉めそやしていた。それが彼女と付き合う遠因ともなったし、人からあまり興味を持たれない自分にとって、彼女が自信を与えてくれる存在なのは確かだ。しかし、それが行き過ぎてうざりたい。容姿のひどさは言うに及ばず、彼女の大げさな言動も空回りしがちな行動も、時々殴り殺してしまいたいほどにイライラさせられる。

祐一は恋人の顔を思い浮かべて、急いでそれを打ち消す。蛇口を思いっきりひねって、激しい勢いで飛び出した冷水でジャバジャバ

と顔を洗った。

祐一の住むアパートは神奈川県横浜市の神奈川区、横浜駅からバスで20分ほどの幹線道路そばにある。高台になっていて、坂の多い横浜市の中でもあまりお目にかからない急勾配の細道を上り下りして通りにでる。このあたりは横浜市中心部からさほど離れていないにも関わらず、交通の便がよいこともあって、市内でも家賃は安めになっている。

3年前にひろ子がインターネットでこの部屋をみつけてきたときに、一度の見学でその場で契約した。6畳一間ロフト付きマンションが6万円ほどのこのあたりで3DK駐車場代込み7万5千円は破格に思えたからだ。そのとき、壁や風呂場に残る小さい血のような斑点のことは考えないことにした。交通の便が悪いとはいえ、5分ほど坂道を上り下りすれば一時間に4本運行する横浜駅行きのバス停があるし、車もある。豪雪地方で育った祐一にとっては少しも苦ではない環境だ。

計算違いがあったとすれば家賃を折半し、いずれこの地でも子育てもすると考えていたひろ子が同棲を解消し、地元の埼玉に帰ってしまったことくらいか。

祐一は愛車、ハリヤーにエンジンをかけ、慣れた手つきでハンドルを切る。この狭い駐車場でこの大きさの車を出し入れできる人間はそうそういないだろうと自負しながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6201y/>

卑肉と棒

2011年11月24日01時54分発行